

## 目指す社会像

VISION

### ひとりひとりの若者が 自分の未来に希望を持てる社会

人には、たくさんの可能性があります。

しかし、環境や周囲の人との関係性のなかで可能性が閉ざされ、本来持つ可能性を発揮できない若者に会えることも多くありました。

そんな背景から、「周囲の人の手を借りて、自分なりの一歩を踏み出せる」という意味をこめました。生きていくなかで嬉しいことも辛いこともありながらも、「まあ、大丈夫かも」と思えるような。それが、「自分の未来に希望を持てる」ということだと思っています。わたしたちは、若者がどんな境遇にあったとしても自分の未来に希望を持てる社会をつくりたい。

## D×Pが成すべきこと

MISSION

### ユース世代を孤立させないために、 セーフティネットと機会を創出する

ユース世代（13-25歳）の若者が自らの境遇に左右されずに自分の未来に希望を持つためには、「安心して日常生活が送れること」と、「本人なりの一歩が踏める機会」が必要です。そのために、困難な状況にあるユース世代に「セーフティネット」と「機会」の両方を創出します。

D×Pは、若者が今いるところに自らの足でおもむき、公的支援も民間支援も手が届かない場にセーフティネットの網の目をつくります。眼の前にある喫緊の課題を解決に向けて動かし、本人なりの一歩が踏めるよう後押しします。D×Pだけで解決しようとせず、世の中にすでにある多様な機会（人、企業、地域）を活かし、つなげます。D×Pは課題のフロントラインに立ち続け、ユース世代の声を聞き、社会に発信し、ともに社会を動かします。

### ロゴに込めた思い



「可能性も困りごと両方を見つめ、ひとりひとりの若者に関わっていく」という決意を込めて、明暗のグラデーションを持ち、ともに未来へと進んでゆくイメージを伝えるために夜明け空から2色を配しました。

「D」はDream（ユメ）、「P」はPossibility（可能性）。ユメを描ける状態と可能性を発揮できる環境——この2つを掛け合わせることが若者の希望につながる、というD×Pの考えが名前の由来です。「d」と「p」の斜めのまっすぐなラインは「時代の変化に即した革新的な取り組みで社会的インパクトを出す」姿勢を、線の中央はユース世代と社会をつなぐ「結び目」を表現しています。

このロゴマークは、2016年に制定されたロゴを元に、D×Pの活動領域の変化・ブランドイメージの変化に合わせて2021年にアップデートしました。

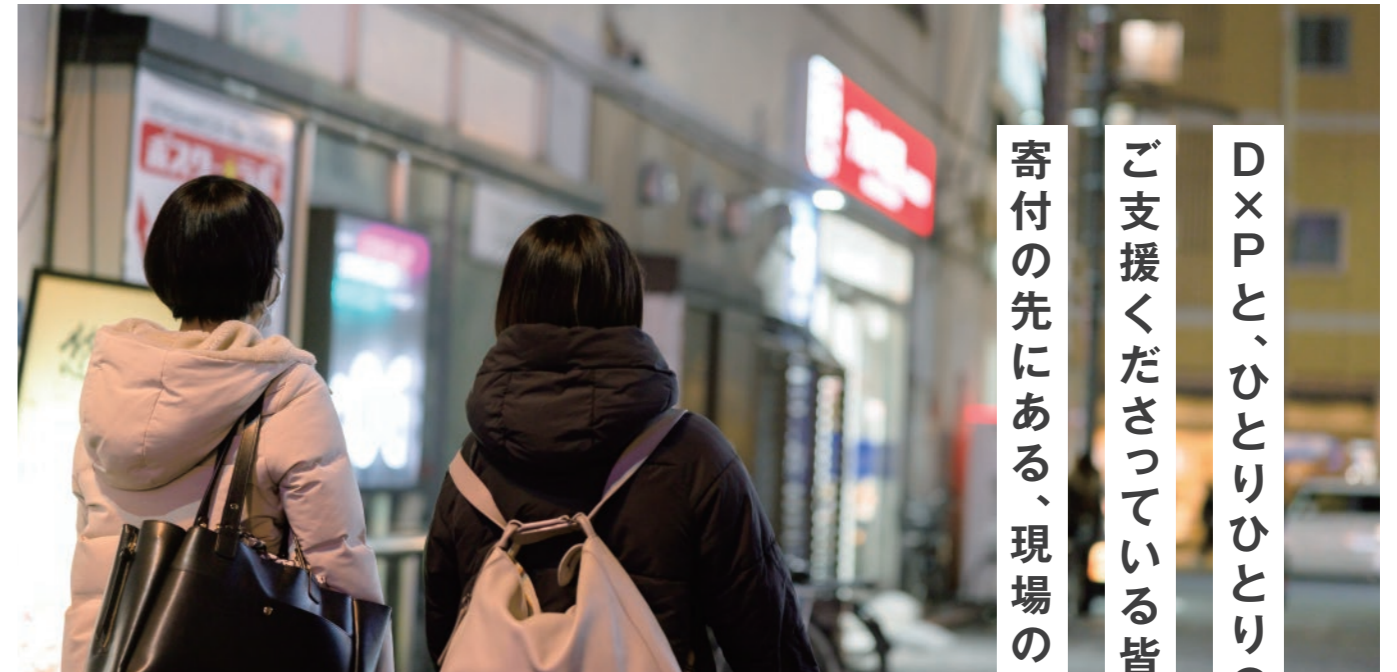


大阪本社 〒540-0032  
大阪市中央区天満橋京町1-27 ファラン天満橋33号室

東京事務所 〒107-0062  
東京都港区南青山6-2-9 南青山NYKビル7F

✉ info@dreampossibility.com ① www.dreampossibility.com  
✕ @npo\_DxP ② www.facebook.com/npodxp

銀行	ゆうちょ銀行 〇九九店 当座 0332445 楽天銀行 第二営業支店 普通 7079724
理事	今井紀明 / 村中直人 / 入谷佐知
監事	毛受芳高
アドバイザー	辻由起子 / 田中宝紀 / 浅見清夏 / 東信吾 / 渡邊淳
顧問弁護士	高橋健
顧問社会保険労務士	長野文紀
顧問税理士	脇坂誠也
写真	西川優介
イラスト	野口綾子
デザイン	雪崩式



「D×Pと、ひとりひとりの若者を  
ご支援くださっている皆様へ  
寄付の先にある、現場のいま」



月額寄付  
サポーター  
募集中!

月1,000円からの月額寄付で  
D×Pの活動に参加できます。

D×Pへ寄付していただくと、  
最大約**40%**のお金が戻ってきます!

月1,000円のご寄付を1年間すると、最大約**5,000円**の控除

D×Pは、大阪府から認定を受けた「認定NPO法人」です。  
認定NPO法人へのご寄付は、税控除の対象となります。  
地方税も寄附金控除の対象となりますが、控除割合は各自治体によって異なります。  
詳細については、各自治体にお問い合わせください。



# 年次活動報告書 2025-26

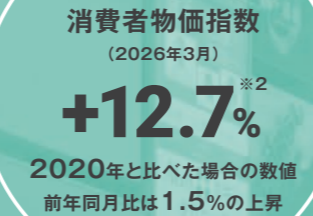
D×P ANNUAL REPORT 2025-26

# ユース世代の孤立

困難な状況に直面



たとえば…



家に居場所がない  
だれかにSOSを出したら拒否された／より状況が悪化した  
学校に居場所がない／周囲に理解されづらい  
福祉制度や奨学金の条件にあてはまらなかった／時間がかかる

SOSを出しづらく気づかれない

## 「自分でなんとかするしかない」

- 闇バイト ● 借金
- 食事の我慢など異様な節制
- オーバードーズ(薬の過剰摂取)や自傷行為をしてやりすごす
- (どうにもならず)自死



※1 こども家庭庁 令和6年度 児童相談所における児童虐待相談対応件数 より  
※2 総務省 2020年基準消費者物価指数 より  
※3 厚生労働省・警察庁 令和7年中における自殺の状況 より

## 理事長 今井紀明からのメッセージ

「親に奨学金を使い込まれている」「冬は冷え込みが厳しく電気代も高く、マイナス10度の外気温の中でもエアコンすらつけられない」——全国から、こうした切実な声が届いています。

ユキサキチャットの登録者は2万人を超え、食糧支援は過去最多を記録しました。また、大阪ミナミの繁華街で運営するユースセンターの利用者も例年を上回り、5,000人近くにのぼりました。

孤立する子ども・若者のセーフティネットや機会を作り続けてきて13年が経ちました。2025年度は経営的に厳しい状況でしたが、支援を途切れさせることなく継続できました。2026年度は、イラン情勢の長期化による物価高騰が懸念され、子ども・若者の生活を直撃するのではという強い危機感を持っています。不安定な情勢も見据え、支援が届く範囲を広げていけるよう動いていきます。



現場の最前線からお届けします!

# D×Pの活動と今年のハイライト

## 不登校相談から生活困窮相談へ ——見えてきた「地続き」の困難

「学校に行けない」という相談をしていた若者から、数年後「生活が苦しい」と連絡が届くことがあります。こうしたつながりから見えてきたのは、不登校と生活困窮が切り離された問題ではなく、時間をまたいで続く「地続きの困難」でした。

本ページでは、実際の相談やデータをもとに、オンライン相談の現場で起きていることと、その関わりのあり方をレポートします。



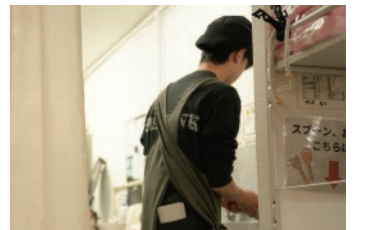
## 親や周囲を頼れない全国の若者と「ユキサキ」を一緒に考える ユキサキチャット

p.3

## 繁華街の若者に、あたらしい「はたらく選択肢」を 一仕事体験プロジェクト

大阪のミナミには、居場所を求めて若者が集まっています。ユースセンターでは、食事や休息の場を提供するとともに、地域や行政など様々な社会的資源への中継地になることを目指しています。

そこで見えてきたのは、一般的な就労の前提と若者の状況との間にあるギャップと、その隙間にあるリスクです。本ページでは、現場の日常とともに、「仕事体験プロジェクト」の取り組みをお届けします。



## 繁華街に来る若者に新しいセーフティネットと機会をつくる ユースセンター

p.5

## 3~4割の方が奨学金の額がわからない ～食費や奨学金に関するアンケート調査の解説～

「食事の量を減らしている」「スキマバイトで食いつないでる」など、現場ではさまざまな声が届きます。しかし、こうした声はD×Pが個別に対応しているだけでは、「制度をつくる場」に届きづらいものです。

D×Pは日々の関わりの中で受け取った声を調査として整理し、記者会見や行政への提言につなげています。本ページでは、食費・奨学金・闇バイトなど複数の調査結果と、その背景にある若者の実態をレポートします。



## 現場の気づきを、社会の仕組みへ——若者の実態を届ける調査と提言 調査提言

p.7

## ユキサキチャット (LINE相談)



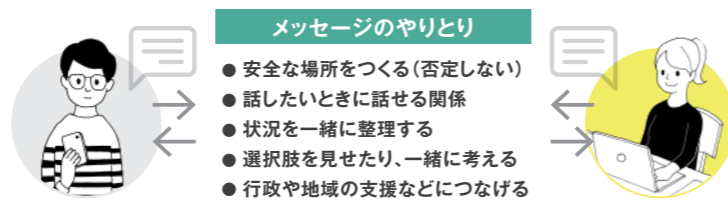
「ユキサキ」を一緒に考える  
全国の13〜25歳と  
親や周囲を頼れない

親や周囲に頼れないなどの事情を持った全国の13〜25歳までの若者に向けたオンライン相談窓口です。食糧支援を組み合わせ、ひとりひとりに応じたサポートをします。「だれかに言ったのは間違いじゃなかった」と思える体験を積み重ね、自分なりのユキサキが見えてくることを目指します。

### ユキサキチャットの関わり

言葉になる前から、始まっている。

ユキサキチャットには、まだ言葉にならない“断片”が届くことがあります。何気ない雑談から始まることもあれば、切迫した状況で連絡が届くことも。だからこそ、課題を特定して支援につなげることを急がず、やりとりの中で状況や気持ちが少しずつ見える過程自体を大切にしています。








#### メッセージのやりとり

- 安全な場所をつくる(否定しない)
- 話したいときに話せる関係
- 状況と一緒に整理する
- 選択肢を見せたり、一緒に考える
- 行政や地域の支援などにつなげる

※本人のニーズに合わせて関わるため、すべての関わりをするとは限りません。

### ユキサキチャットでの対応例

 <p>20代前半です。アルバイトを解雇になりました。精神疾患があり、仕事をするのがつらいです。虐待を受けており、親を頼ることはできません。多重債務があります。生活保護には抵抗感があります。</p>	 <p>ひとり暮らしの大学生です。親からの支援は受けられず、奨学金も反対されて借りることができません。学費と生活費を自分で稼いでいたのですが、今月支払い予定の学費が足りません。このままだと除籍になってしまいます。</p>
<p>生活が苦しくごはんが食べられない状況にあったため、食糧支援を実施しました。また、生きることがしんどいという気持ちも受け止めながら、生活保護などの制度の説明を丁寧に言い、行政での相談を促しました。</p>	 <p>学費の延納について学校に相談してみるように助言。その間にアルバイトで稼げる額を整理し、足りない部分を現金給付としてお送りしました。あわせて、長期で食糧支援を実施し、卒業までの生活をサポートしました。</p>
 <p>生活保護を受けて、その間に体調を整えることができました。働くことができるようになり、生活保護の利用を終えられました。どうにもならないと思っていましたが、先が見えてきました。</p>	 <p>今まで食費をかなり削っていたので、しっかりごはんが食べられました。その後、無事大学を卒業することができました。これから社会人として一歩一歩進んでいきたいです。</p>

### データから見えるユキサキチャット

ユキサキチャット登録者数(全国の若者)

**20,184**人

昨年度より約3,500人増加

食糧支援数(食数)

**119,490**食

昨年度より22,830食増加

現金給付額

**1,552**万円

昨年度より718万円減少\*

※今後自立して生活する方法と一緒に考えることを優先し、給付額を減らして各種公的制度的利用を促すなどしたため。

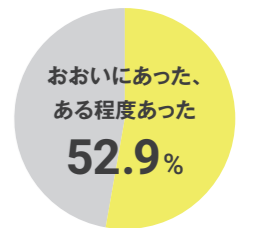
### 最近のユキサキチャットから現場レポート

## 不登校相談から生活困窮相談へ

## 見えてきた「地続き」の困難

中高生時代に不登校の相談をしていた方が、学校を卒業して数年後、「仕事が続かない」「生活が苦しい」と再びユキサキチャットを頼ってくださるケースが増えてきました。文部科学省の調査では、小・中学生の頃に不登校を経験したことで、仕事(就職活動を含む)で苦勞したと回答した方が約半数になりました。

「仕事(就職活動)で苦勞した」



※文部科学省「不登校経験者等を対象とする調査」(令和7年)

#### Q. どうして数年後に再び頼るようになったの?

A. 不登校と生活困窮の相談は一般的には別々の窓口で対応されることが多いです。学校を卒業・退学すると支援がいったん途切れ、生活困窮も別の窓口で相談する必要があり、一貫したサポートを受けることが難しい側面があります。ユキサキチャットは13〜25歳であれば、不登校も生活困窮も同じ場所で相談できます。だから、中高生のころ相談してくれた方が、数年後に生活に困ったときもまた連絡してきてくれる。その「再会」が積み重なりました。

#### Q. 不登校経験と生活困窮は関係しているの?

A. 不登校の背景はひとりひとり違います。「不登校経験があると生活に困りやすい」という単純な話ではありません。ただ、たくさんの相談を重ねる中で見えてくるのは、中高生のころにあったしんどさ——体調の不安定さ、コミュニケーションの難しさ、家庭環境——が、学校を卒業したあととも続いているということです。それが解消されないまま時間が経ち、就職でつまずいたり、働き始めたけれどしんどくなってしまふ。そんな「地続きの困難」が見えてきました。

### 「地続きの困難」に、地続きで

ユキサキチャットの相談員のもとに届くのは、「不登校の相談」でも「生活困窮の相談」でもなく、その人自身のことです。だからこそ、困難も回復も、地続きで見えてきます。たとえば自治体の窓口や病院に行ったほうがいいのはわかっているけれど、どうしても行けずにいる期間を数か月一緒に過ごして、やっと行けた日に相談員と一緒に喜ぶこともあります。ユキサキチャットはこれからも、若者ひとりひとりのユキサキが見えるよう、地続きで関わっていきます。



# ユースセンター



**機会をつくる**  
**新しいセーフティネットと**  
**繁華街に**

大阪有数の繁華街であるミナミや道頓堀のグリコ看板の下（以後、グリ下）周辺で夜を過ごす13～25歳の若者を対象に、安心・安全に過ごせるよう開設しました。食事や休息の場を提供するとともに、地域や行政、支援機関などさまざまな社会的資源への中継地になることを目指します。

## ミナミのユース世代を取り巻く環境

虐待や経済的困窮などを背景に居場所を求めて繁華街に集う若者がいます。繁華街は彼らにとって大切な居場所である一方、さまざまなリスクとも隣り合わせです。



## ユースセンターでできること

自分のこれからと一緒に考える人となつがる



生活相談、病院・自治体に同行し連携、専門家も来訪

エネルギーをためられる



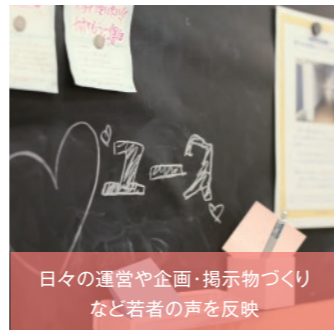
温かいごはん、充電・仮眠・雑談、マンガ・音楽・楽器

若者と社会がつながる



若者と地域行事に参加 宿泊施設の整備を行政に提言

自分の意見が尊重される



日々の運営や企画・掲示物づくり など若者の声を反映

## データから見えるユースセンター

ユースセンター開所回数

**130**回

昨年度より**58**回増加\*

ユースセンターのべ利用者数

**4,989**人

昨年度より**1,443**人増加

食事提供数

**4,133**食

昨年度より**1,246**食増加

※今年度より年度ごとの数字表記 ※新規企画を含む数値

## 若者にあたらしい「はたらく」選択肢を

若者の中には「今すぐお金が必要」という切実な状況に置かれている人も多くいます。「働きたい」という気持ちはあっても、一般的な就労とのギャップがあり働くことをためらったり、仮に働いてみても継続しないことが少なくありません。それでもお金が必要な若者に性産業や闇バイトに斡旋・勧誘する大人がいることも事実です。

### 就労に求められる“前提”と、若者の現状の間にあるギャップ

一般的な就労に求められること

- 生活リズムが整っている
- 心身の安定
- ルール・マナーへの適応
- 対人関係の円滑さ

繁華街で出会う若者の背景

- 住まい・生活が不安定
- 心身の不調、波が大きい
- ルールや集団への苦手意識
- 対人関係での傷つき体験

このギャップが就労を阻むハードル

私たちのアプローチ

自分に合った「働ける形」を見つける

若者にとって重要なのは、既存の働き方に自分を合わせるのではなく、自分に合った「働ける形」を見つけていくこと。そのために、若者が「働ける形」をつくるプロジェクトを立ち上げました。2025年度はその第一歩として、カフェの仕事を経験できる機会からスタートしました。

## 現場からのレポート

### 『夜カフェ仕事体験企画』

実施回数—6回  
参加した若者の人数—延べ11人



当日の様子

当日はスタッフや関係者が客として来店し、参加者は「接客」「調理」「準備」など、やりたい役割を選んで働きます。提供メニューは毎回工夫しており、スパイスカレーやアチャール、ルーローハン、豆花（トウファ）など、本格的な料理づくりにも取り組みました。それぞれが無理のない形で関わりながら、「働く体験」を積み重ねています。

若者の声・変化

Q. 続けて参加できた理由は？  
美味しいって言うてくれるのが嬉しい。面に向かって言ってもらえるのが心地いい。多少しんどくても来れる。

Q. これまでの“仕事”のイメージは？  
生きるための手段。働かなくてもいいなら働きたくないし。全部が全部、自分の時間、体力を奪われてお金をもらっているから。

Q. 参加してイメージは変わった？  
ちょっと変わった。飲食の厨房に対するイメージが悪かったけど、また仕事するなら料理系がいいと思うようになった。

スタッフの声

試験的な実施を通じて、若者が自己理解を深めたり、来店された方から感謝されたりすることで自信を持つ機会をつくることができました。今後はお店のコンセプト設計や価格設定を進め、体験だけではなく対価を得られる就労機会につながるような仕組みを整えていきます。体験で得た気づきや今後の希望と一緒に整理し、次のステップにつなげられる体制の構築を目指します。



# 調査提言



現場の気づきを、社会の仕組みへ  
若者の実態を届ける調査と提言

困難な状況下にある若者のニーズは、制度や政策がつくられる場に届きにくいことがあります。家庭が機能していない、住所がない、窓口まで行けない——  
そういった状況は、制度を設計する際に「想定の外」にあることが少なくありません。

D×Pは、毎日の関わりの中でそうした若者の声を聞き続けてきました。個別のケースでは「困っている人がいる」で終わってしまうことも、集めて整理して届けることで、制度や支援が変わる可能性になります。調査提言は、現場の気づきを社会の言葉に翻訳する仕事です。

## 調査方法

アンケートやヒアリングを通じて、若者の声や実態を把握します。全国の若者を対象としたオンライン調査や、日々の関わりの中での聞き取りをもとに、生活実態や感じている課題を収集・分析し、傾向として整理します。

## 大切にしているポイント

若者にとって負担の少ない調査を行うことを大切にしています。調査が不利益や負担につながらないように配慮しながら、目の前の困りごとや生活実感から出発し、制度や統計には表れにくいニーズを可視化することを目指します。

## 3つの調査が映した、若者の「見えない声」

※いずれも認定NPO法人D×P調査 ユキサキチャット登録者を対象。詳細はwebページに記載されています。

### 食費や奨学金に関するアンケート調査

### 若者の年末年始に関するアンケート調査

### 闇バイトに関するアンケート調査

「食費の増加への対応策として「食事の量や回数」を減らす」

「年末年始(クリスマスから正月にかけて)「不安だ/すごく不安だ」

「実際にあやしい求人を見たり誘われたりした経験がある」



43.0%が「食事の量や回数」を減らすと回答。またキャッシング・福祉資金貸付・保護者・友人等、なんらかの形でお金を借りて対応した人は全体の22.1%でした。



「金銭的に余裕がない」、「食事が十分にとれないことがある」、「光熱費が十分でなく、寒さをしのぐのが大変」といった不安を感じる理由があげられました。



39.8%が「実際にあやしい求人を見たり誘われたりした経験がある」、11.7%が「実際に経験がある・周囲に経験ある人がいる」と回答しました。

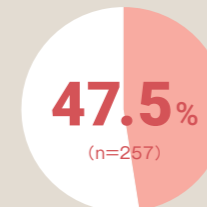
## 食費や奨学金に関するアンケート調査

ユキサキチャットでは、物価高や生活苦に関する切実な声が日々寄せられています。

こうした状況の中で、困窮している若者が食費や奨学金に関してどのような困りごとを抱えているのかを把握し、その実態を広く社会に届けることで、支援の改善につなげていくことを目的に、ユキサキチャットの利用者を対象としたアンケート調査を実施しました。

国内平均の半額未満

「1ヶ月の食費が20,000円未満」



※ひとり暮らし・寮生活の単身者世帯を対象  
※総務省家計調査(2024年度)では単身世帯の食費支出平均が44,227円

「学生単身層の1ヶ月の食費」

22,658円

単身の生活保護受給世帯(29,643円)より約7,000円安く、約4分の3の額

※学生かつ単身者世帯を対象  
※厚生労働省「社会保障生計調査(2023年度)」

## 実際にいただいたギモンに、答えてみました。

2025年12月に発表した「食費や奨学金に関するアンケート調査」では、ユキサキチャットを利用している方のうち、給付型奨学金を受給した方の29.8%、貸与型奨学金を受給した方の38.3%が、給付/貸与額について「わからない」と回答しています。この結果に関して、実際にいただいた質問に答えてみました!



### Q. どうして3~4割の方が「自分の奨学金の額がわからない」の?

A. 奨学金は本人口座に振り込まれ金額も明示されるのが一般的ですが、それでも「わからない」という回答が生まれる背景には、いくつかの状況が重なっています。たとえば、ユキサキチャットでは以下のケースがありました。

①奨学金の入る口座を本人が管理していないケース

申請や管理を周囲の大人が担い、若者本人が把握する機会を持たないまま進学するケースです。「毎月使える金額」は知っていても、総額や種類まで理解できていないことがあります。

②複数の「奨学金」の混在や変動により把握が難しいケース

給付型・貸与型・教育ローン・自治体支援などが「奨学金」としてひとまとめにされるうえ、支給額が年度ごとにも変わることもあり、「今いくら受け取っているか」の整理が難しくなります。

③自分にはどうにもできないものと捉えるケース

家庭内の金銭管理の不安定さや、奨学金が本人の意図しない形で使われてしまう状況に置かれ、「自分ではどうにもできないもの」と感じて、把握すること自体をあきらめる若者もいます。

### Q. どうして自分のことなのに把握しようとししないの?

A. 生活がひっ迫していると「今日をどう乗り切るか」が最優先になり、将来の返済総額を把握するための余裕を持ってない若者も少なくありません。無関心なのではなく、把握できるだけの状況にないと言えます。アンケートの自由記述には「借りなければ良かった」「将来返すことばかり頭から離れなくてつらい」といった声も見られました。「わからない」という回答自体が、困りごとのサインなのではと捉えています。

### Q. なぜこのアンケート調査をしたの?

A. もともと「物価高で高齢者もどの層もみんな大変なのに、なぜ若者を支援しないといけないの?」と提言活動の中で問われる機会があり、食費や困窮の度合いを調べてみようというアンケート調査を実施。アンケートでは、困窮している若者の中でも特にひとり暮らしの学生が困窮しており食費に困っているという結果が出ましたが、報道ではなかなかそこを取り上げていただくことができませんでした。引き続き、他のアプローチも模索していきます。

日々D×Pのスタッフは、目の前の若者と関わりながらも、同時に問い続けています。どうしてこの若者はこういう状況に置かれているのか、なにが若者をそうさせたのか、と。もちろん個人に紐づく理由もありますが、そこには社会構造上の課題があることも

見えてきます。その問いを社会と共有し、制度や政策をつくる現場に届けていくことが欠かせない仕事だと考えています。国や社会にもなかなか届けていない声や統計的な調査を含め、発信していくことができると思っています。



# たくさんの方に支えていただきました。(2025年4月1日から2026年3月31日まで)

D×Pが、ユキサキチャットでの相談や食糧支援・現金給付支援が実施でき、大阪ミナミの繁華街でユースセンターの活動に取り組めるのは、ご寄付・ご助成いただいている方のおかげです。一部となりますが、サポーターの皆様をご紹介します。(敬称略・順不同)

 Airbnbコミュニティ基金	 サントリーホールディングス株式会社	 Water Dragon Foundation Water Dragon Foundation	 FIRST DOM/NO break through yourself	NPO法人CYサポート
 株式会社PoliPoli	 株式会社PoliPoli	 大阪マラソン	 アリナミン製薬株式会社	赤い羽根共同募金 地域の子ども・高齢者のために
 株式会社フェリシモ	 GET IT	 株式会社ファイブグループ	株式会社 蒼江	 マツダ株式会社
 株式会社SAKURUG	 株式会社ビューティーネイラー	 北海道ポラコン株式会社		 ハートポケット倶楽部
 株式会社SAKURUG	 株式会社ビューティーネイラー	 公益財団法人ミダス財団	 サイボウズ株式会社	 NPO法人ハミングバード
 スパイスファクトリー株式会社	宗教法人 寶松院	 株式会社Dreams	一般社団法人 教育コミュニケーション協会 代表理事 木暮太一	 村上財団 The Murakami Family Foundation 一般財団法人村上財団
 株式会社ジーン	一般財団法人 日本社会支援財団 Japan Social Support Foundation	 株式会社ドラゴン教育革命	株式会社結	 株式会社いすず商店
 イノベシア株式会社	 株式会社成基	 高橋商会株式会社	 御堂筋税理士法人	 えびす工務店

山田安廣	佐竹建亮	高城いづみ	辻本義信	蓑田秀策	高島弥寿子	畑中洋亮・亜希子	藤崎まり子
Dr. Pooh	天沼えり子	北川雅彦	佐俣アンリ	橋本誠治	福島保	安江佳余子	山岡悦子
西尾伸介	小林明子	高津玉枝	高橋知裕	地守亮	山上義人	中野秀子	永田勇貴
安田陽介	傍楽 駒井亨衣	吉田雅一	藤田耕司	唄恵子	守屋まゆみ	白石匡	武田重之
山本秀子	山本由紀	鈴木祐子	藤野英人	守屋淳			

## 月額寄付サポーター

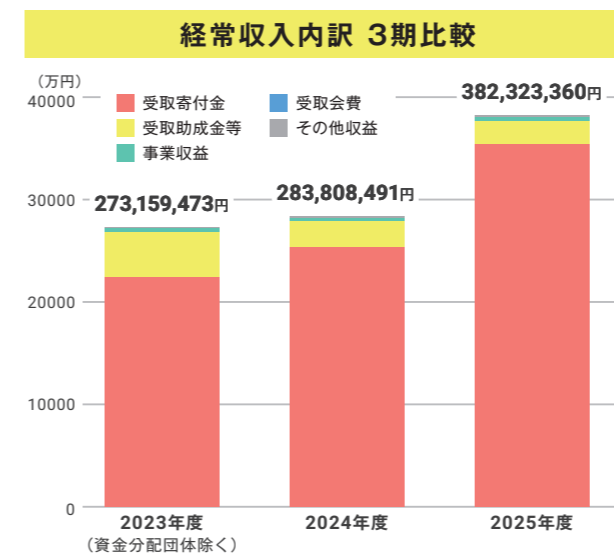
# 3,762人

「世界情勢が不安定な中で、子どもが生きる未来が少しでもいいものになるように」「微力ながらそのセーフティネットをつくる一員になれたらと思いました。」そんな声とともに、たくさんのご寄付をいただいています。月額寄付サポーターは3,593人、法人は169社。クラウドファンディングでは1,918人の方に応援いただき、初めてD×Pに寄付してくださった方もいます。さまざまな形で寄せられた想いととも、26年度も活動を広げていきます。

# 2025年度 活動計算書 (2025年4月1日から2026年3月31日まで)

科目	金額(単位:円)	
	前期 (2024年度)	今期 (2025年度)
経常収益		
受取会費	55,000	55,000
受取寄附金	253,157,939	353,750,713 ①
受取助成金等	25,889,032	23,203,620 ②
事業収益	2,424,589	3,028,747 ③
その他収益	2,281,931	2,285,280 ③
<b>経常収益合計</b>	<b>283,808,491</b>	<b>382,323,360</b>
経常費用		
(1)事業費		
給料手当/法定福利費	141,749,685	136,821,361 ④
福利厚生費	1,403,218	1,066,187
通勤費/旅費交通費	6,445,839	6,479,533
消耗品・備品費	1,304,116	1,827,934
賃借料	11,348,414	11,296,085 ⑤
通信費	8,017,609	8,058,246
業務委託料	44,558,902	46,705,380 ⑥
広告宣伝費	28,577,124	19,867,501 ⑦
支払手数料	23,267,954	22,806,069 ⑧
会議費	1,578,991	1,480,724
給付支援費	42,858,656	39,473,927 ⑨
減価償却費	2,441,674	2,701,949
その他	4,614,959	5,143,712
<b>事業費合計</b>	<b>318,167,141</b>	<b>303,728,608</b>
(2)管理費		
給料手当/法定福利費	32,832,980	18,244,797 ⑩
その他	17,322,023	15,799,824 ⑪
<b>管理費合計</b>	<b>50,155,003</b>	<b>34,044,621</b>
<b>経常費用合計</b>	<b>368,322,144</b>	<b>337,773,229</b>
当期経常増減額	-84,513,653	44,550,131
経常外収益	100,000	56,406
経常外費用	0	22,725
税引前当期正味財産増減額	-84,413,653	44,583,812
法人税・住民税及び事業税	76,721	21,296
当期正味財産増減額	-84,490,374	44,562,516
前期繰越正味財産額	86,143,206	1,652,832
次期繰越正味財産額	1,652,832	46,215,348 ⑫

※今年度はその他の事業を実施していません。



紙面の都合上掲載できませんでしたが、すべての勘定科目別に表記されている活動計算書(P/L)、貸借対照表、財産目録、そして監査報告書はD×PのWebサイトに開示しております。合わせてご覧くださいませ。

この活動計算書は会計簿簿の記載金額と一致し、認定特定非営利活動法人D×Pの収支を正しく示していることを認めます。

監事 毛受芳高(一般社団法人アスパシ)  
会計監査 公認会計士 大磯毅(株式会社わかば経営会計)

**① 受取寄附金**  
大きな額のご寄付を頂戴したため、昨年度比約1億円の増収となりました。約1.2億円が定期的なご寄付です。月額寄付サポーターは3,762人となり多くの皆様に支えていただきました。

**② 受取助成金**  
昨年度からやや減少しました。助成金は特定の用途やテーマに沿って活用させていただく貴重な財源です。一方、複数年にわたってD×Pの活動全体を支えてくださっているのが、定期的なご寄付です。

**③ 事業収益/その他収益**  
「事業収益」は主に講演料、「その他収益」はAmazonビジネス利用時の値引分などを計上しています。

**④ 給料手当/法定福利費**  
皆様からいただくご寄付の多くが人件費に充てられています。一方、2025年度は退職や賞与の減額もあり、昨年度比で約500万円下がりました。相談者数、利用者数は増えているため、現スタッフは困難な局面に耐えてくれました。若者からの複雑性の高い相談を多数受け取り、幅広い専門性と業務遂行能力が求められるスタッフがバーンアウトせず持続可能に働くことができるよう、今後も待遇改善と増員を進めます。

**⑤ 賃借料**  
大阪ミナミの繁華街にあるユースセンターの賃借料が大部分を占めています。

**⑥ 業務委託料**  
ユキサキチャットやユースセンターのスタッフの一部は、業務委託契約で現場運営をしています。調査提言や広報、AIチャットボットの運用等も委託により運営しています。

**⑦ 広告宣伝費**  
今年度上期は財政の健全化のため広告宣伝費を下げる判断を行いました。しかし発信にかかる費用を下げることは長期的なマイナスの影響があるため次年度は上げる方向です。

**⑧ 支払手数料**  
生成AI使用料、利用者/相談者管理システムや寄付受け取りのための利用料、現金給付実施による振込手数料も含まれます。

**⑨ 給付支援費**  
若者に送る食糧や日用品、家賃等生活費のための給付、ユースセンターで提供した食事代などが「給付支援費」にあたります。うち現金給付は昨年比約718万円減少しましたが、これは支援の縮小ではなく、今後自立して生活する方法を若者と一緒に考え、公・民間問わず各種制度も活用しながら伴走した結果です。

**⑩ 給料手当/法定福利費(管理費)**  
管理部門スタッフの育休や退職があり、業務委託によってカバーする体制としたため人件費が下がっています。3億円規模の組織を支える人員数としては不足しているため、次年度は増員を目指します。

**⑪ その他(管理費)**  
うち業務委託料約639万円、支払手数料約397万円、支払報酬料約164万円などが主な支出です。今年度の管理費率は10%と、低い水準になりました。D×Pでは、管理費は不正を防止し安全に運営するために必要不可欠なコストと考え、引き続き必要経費を支出する方針です。

**⑫ 次期繰越正味財産額**  
約4,600万円を次年度に繰り越しました。2024年度は物価高の影響によって赤字となりましたが、今年度は寄付額の伸びと経費縮小により大きく回復できました。一方、2026年度はイラン情勢長期化による物価高が若者の生活に影を落とすことを強く懸念しています。そのため次年度は、支援をより拡張できる体制をつくりたい。具体的には繰り越した資金を①倉庫移転による食糧発送数のキャパシティ向上、②スタッフの増員や待遇改善に充て、増加するニーズに対応できる体制を強化・拡充する見込みです。

